

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5534号  
8月号  
平成23年7月29日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【概要】

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

〈1週目の予報〉 7月30日(土)～8月5日(金)

天気は、期間の前半は高気圧に覆われて晴れの日が多く、後半は湿った気流の影響で雲が広がりやすいでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

〈2週目の予報〉 8月6日(土)～8月12日(金)

天気は、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。

〈3週目から4週目の予報〉 8月13日(土)～8月26日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または高い確率ともに40%。

〈次回の発表予定等〉

1か月予報：毎週金曜日 14時30分 次回は8月5日

3か月予報：8月25日(月曜日) 14時

## 普通作物

### ◆ 普通期水稻

---

台風・豪雨等の災害が発生しやすい時期ですので、気象情報に注意し、用排水路の整備・清掃など早めに行っておきましょう。

#### 1 水管理

8月上旬から幼穂の伸長期となります。根の健全化を図るため間断かん水を行います。下旬の穂ばらみ期から出穂開花期にかけての水不足は、穎花の発育や受精に悪影響が出ますので湛水状態とします。

#### 2 追肥

出穂前15～20日頃で幼穂の長さが1匁程度になったら、葉色に合わせて適量の穂肥を施用します。なお、田植え時に一発型の肥料を用いたほ場では施用する必要はありません。

#### 3 病虫害防除

トビイロウンカは急激に増殖し坪枯れをおこします。今年はや過ぎから下旬にかけて第2世代の幼虫期間が予測されていますので、発生情報に注意しこの頃に防除を行います。穂いもちの発生は大きく減収するので、出穂期頃に防除します。

カメムシによる斑点米は等級格下げの原因になります。穂ばらみ前に畦畔及び水田周囲の草刈りを行い、防除は穂揃い期とその10日後の2回行います。防除の際は周辺作物に飛散させない等、危害防止に努めます。

### ◆ 大豆

---

#### 1 中耕、培土

雑草対策や地力窒素の発現を促すため、中耕、培土を2回行います。第1回目は、本葉3葉期に第1節の位置まで、第2回目は、本葉5葉期に第3節の位置まで行います。培土は開花期までに終わります。

#### 2 排水対策

大豆は湿害に弱いので、大雨による冠水や滞水を避ける

ため額縁排水などの排水対策を実施します。

### 3 病害虫防除

今月はハスモンヨトウの発生時期です。薬剤は若齢幼虫時の初期防除が効果が高いので、ほ場での観察に努め、食害による白い斑葉の発生を確認したら直ちに防除します。

## ◆そば

---

### 1 ほ場の選定

そばは大豆以上に湿害に弱い作物ですので、排水の良いほ場を選び額縁排水などの排水対策を行います。

### 2 播種

播種時期は、山間地域は8月上旬～中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

10㎡当たりの播種量は、条播が6㎏、散播では10㎏程度です。

施肥は、窒素成分で10㎡当たり2.5㎏です。

(鎌田 博人)

## 果菜類

8月は施設野菜の育苗開始時期となります。この時期の高温は、雌花の着生や発達に大きな影響を与えますので、温度管理に注意が必要です。

育苗ハウスは、害虫の侵入防止対策として防虫ネットが設置してあるものがほとんどですが、ハウス内の温度が高くなる傾向にありますので、遮光資材を利用し昼間の温度上昇を防ぐことが大切です。遮光資材は、遮光率の低いものを日中の高温時に使用し、曇雨天日や朝夕は光が当たるようにすることが必要です。

## ◆きゅうり

---

露地抑制・ハウス抑制栽培の育苗期に当たります。高温期の育苗のため、茎葉の生育が早く、地上部に対して根量が少ない場合が多く、定植後の活着不良等が懸念されますので、健苗育成のためにはハウス内の温度を下げ、こまめにかん水を行うことが必要となります。

また、この時期はアブラムシやミナミキイロアザミウマ

が媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要となります。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぐとともに、定期的に薬剤防除を行います。ウイルスの伝染源となる庭先での自家用のきゅうり、かぼちゃなどの栽培を控えるとともにハウス周辺の除草の徹底も重要となります。

#### ◆ピーマン

---

は種床にセルトレイを利用することが多くなっています。セル苗など若苗で定植する場合には、初期生育が旺盛になるため、基肥を減肥したり、活着後のかん水を控える等、草勢を調整する必要があります。

鉢上げを行い二次育苗する場合には、生育に伴い蒸散も盛んになるので、日中乾燥しないようにかん水を適宜行います。ただし、夜間多湿になると徒長や疫病発生の原因になるので、夕方のかん水や多かん水は避けます。

生育が進むと葉が重なり徒長するので3回程度鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。また、CMVによるモザイク病の発生が懸念されますので、きゅうりと同様の対策を徹底します。

（郡司 孝幸）

### 葉茎菜類及びいも類

#### ◆土づくり

---

秋冬野菜のは種、植付けの時期となります。収量・品質を高めるためには、深耕による物理性の改善、土壌pHの調整による化学性の改善、堆肥等の有機質資材の投入による生物性の改善と3つの視点での土づくりが必要となります。深耕やpHの調整は1ヶ月前には行い、堆肥は完熟したものをを用いるようにしましょう。

#### ◆加工にんじん

---

播種時期となります。高台地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となります。ニンジンは一斉に発芽させることが重要なポイントとなり、土壌が乾燥又は過湿の状態では、発芽率が低下しますので、かん水施設

のあるほ場では、播種前後に適度にかん水し、施設のないほ場では降雨により適度の土壌水分が確保できる状態で播種しましょう。

#### ◆食用かんしょ

---

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなりますので、今月末までには収穫を終えましょう。普通堀では秋にかけて鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、農薬防除を行います。

#### ◆さといも

---

マルチ栽培の石川さといもは収穫を遅らせると水晶芋や割れ芋等が発生し品質が低下しますので盆までには収穫を終えましょう。

中生種では8月の土壌水分量が収量に大きく影響しますので、かん水が可能なほ場ではスプリンクラーの利用や通路かん水などを行ってください。また、今月から来月にかけてはヨトウムシ類が発生します。若齢幼虫期に防除を徹底しましょう。

#### ◆キャベツ・はくさい

---

年末～年明けに出荷する作型の播種時期となります。苗床として、サイドに防虫ネットを張ったハウスを準備し、120～150穴セルトレイで育苗します。25日前後で定植期に達しますので、本ぽの準備が遅れないようにしましょう。

(河野健次郎)

### 果樹

#### 1 常緑果樹

---

##### ◆温州みかん

今年の温州みかんは、樹や園地によって結果量がばらついています。Mサイズの果実横径は8月10日の時点で50から56<sup>ミリ</sup>が理想です。結果量が多く、肥大が遅れている樹については、さらに仕上げ摘果を行いましょう。

#### ◆ 完熟きんかん

今年、春先の低温による発芽のばらつきや遅れによって、開花が平年よりも遅れ、結果時期もやや遅くなっています。結果の遅れた園地では、初期肥大の確保と早期摘果が特に重要なポイントとなります。結果確認後の施肥とかん水を十分に行いましょう。また、8月下旬からは、傷果を中心とした荒摘果を開始しましょう。

#### ◆ 日向夏

この時期から日焼け果が発生してきますので、ダニ防除を実施し、袋掛けを行い、良品確保に努めましょう。

#### ◆ マンゴー

剪定後に発生した枝の緑化が遅れると、花芽分化や結果に悪影響を及ぼします。緑化が遅れている園地では、葉面散布によって新梢の早期緑化を図りましょう。

## 2 落葉果樹

---

#### ◆ ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の作柄にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

#### ◆ クリ

今月から収穫が始まります。毎日収穫し、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病虫害果や腐敗果を減らすことができ、その後の品質も良好になります。

## 3 台風対策

---

防風施設は、果実への被害を軽減させます。防風ネットの点検を実施しましょう。

また、長時間の冠水は病気の発生を助長します。排水溝の整備を行いましょう。

幼木や高接ぎ樹の誘引・結束も確認しましょう。

台風通過後は、折損部の保護や倒伏樹の引き起こしと根締めを行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策などで行う薬剤散布は、枝葉や果実に付着した薬剤が台風の雨によって表面に広がることで、病原菌などの発芽や伸長を抑制し、防除効果を発

揮します。防除は、台風襲来前に実施しましょう。

海岸近くで塩害の恐れがある時は、直ちに散水して塩分を洗い落としましょう。

#### 4 果樹全般

---

##### ◆ 除草

夏の下草は、樹体との養水分の競合や病害虫の温床となるので、草刈りを行いましょ。刈った草で土壌表面を被うことで、土壌の乾燥防止による細根の発生促進や、土壌浸食の防止につながります。除草剤と草刈りを上手に組み合わせ作業を行いましょ。

(山口和典)

#### 花き

##### ◆ 夏秋ギク

---

強い日照により成長点付近の葉焼けが懸念されますので、遮光や換気、葉面散布剤の散布等を実施してください。

「フローラル優香」の9～10月出荷の奇形花（貫生花）は再電照の開始時期に影響されますので、適期である総苞形成前期（3期）から再電照を開始してください。

##### ◆ 秋ギク

---

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を進めてください。冷蔵は穂・苗の貯蔵・確保と成長促進のために2～4℃で実施しますが、冷蔵期間が長期になると穂の傷みが多くなります。さらに、「神馬」系統の品種は開花遅延も懸念されますので、冷蔵は3週間までにしてください。「神馬66-4」につきましては、従来の「神馬」に比較してやや早生系統ですので、11月作型の電照開始は早めに実施しましょ。

##### ◆ ホオズキ

---

最も暑い時期の出荷になりますので、収穫後速やかに水につけるとともに、結束時に水切りを実施し、十分な水揚げを行いましょ。ホオズキは系統により着果や実の形・「シミ果」の発生程度等が異なります。また、ウイルス性

の病害も増加していますので、本年の栽培株で着果や品質の良い株があったら印を付け、その地下茎を確保し、翌年は区別して栽培してください。その他、年々立ち枯れ性の病害が増加しています。地下茎を残すほ場以外は気温の高い時期に湛水、土壌消毒を実施しましょう。

#### ◆スイートピー

---

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。吸水中に酸素不足になると発芽率が低下しますので、吸水処理は流水中で行ってください。処理には定植数より多めの種子を準備し、未発芽種子は取り除いて冷蔵を行ってください。冷蔵中は庫内温度や水分を定期的に点検してください。中山間地域の一部では植え付けが始まりますが、遮光等の高温対策は十分に行ってください。

#### ◆シキミ

---

気温が高くダニ類の被害が多い季節になります。定期的な防除で良品生産に努めてください。最も需要のある時期ですが、高温期で細菌が繁殖しやすいので清潔な水で水揚げを行い、出荷先で事故品が出ないように気をつけましょう。また、黒シミ斑点病については、今月も引き続き防除を徹底し、感染防止に努めましょう。

#### ◆デルフィニウム

---

育苗中は、定植時に本葉10枚前後に達するのを目標にかん水、施肥を行ってください。中山間地では定植が始まります。早期抽だいを抑えるためにハウス内は換気や遮光を行い、できるだけ気温の上昇を防ぎましょう。定植から抽だいまでは株が充実するように十分にかん水してください。また、チビクロバネキノコバエとうどんこ病等の病害虫を本ぼに持ち込まないように定植前に防除するとともに、ほ場での発生に注意してください。

#### ◆トルコギキョウ

---

種子冷蔵終了後の夜冷育苗が始まります。育苗中の高温や乾燥は低温の効果が失われますので、日中は十分な換気を行うとともに、適切なかん水管理に努めてください。

(中村 広)



## 畜産・飼料作物

盛夏を迎え、家畜の生産性が低下する時期です。畜舎内の通風や換気には特に気をつけてください。家畜も人間同様、暑さだけでなく湿度にも弱いいため、気温がそう高くななくても十分な暑熱対策が必要です。

送風ファンで風通しを良くし、ミスト機による畜舎内散水、あるいは屋根への散水で畜舎内の温度を下げるようにしてください。牛舎への風通しを良くするため、牛舎付近の雑草の刈り取りや風通しの妨げになる資材等を片付けましょう。

日差しが牛舎内へ直接当たらないよう、寒冷紗を設置することも効果的です。給水器もこまめに清掃し、家畜がいつでも新鮮な水を十分飲めるようにしてください。

高温多湿でサイレージの2次発酵がおきやすく腐敗も懸念されます。サイレージを取り出した後は、ビニルをすぐにかき、できるだけ空気を抜くようにしてください。給与時に腐敗やカビを見つけたり、通常のサイレージ臭と違うニオイがした場合は廃棄するよう心がけてください。

牛では暑熱期に、濃厚飼料と粗飼料給与のバランスが崩れ、ルーメンアシドーシスが発生しやすくなります。良質な粗飼料を十分食べ込ませたのを確認してから、濃厚飼料を給与するようにしてください。

蚊やサシバエなどの吸血昆虫も発生しやすくなります。定期的な清掃や殺虫剤散布を行いましょ。たい肥舎のたい肥も十分攪拌し、好気発酵とすることで、たい肥温度を上げ害虫の発生を抑え、良質たい肥の生産を目指しましょ。

飼料作物ではトウモロコシの収穫時期になります。適期収穫を心がけ、サイレージ調製に当たっては、十分に踏圧を行い、ビニルをすきまなく掛け、嫌気発酵（できるだけ空気を入れない）するようにします。ソルゴーの2番草までの収穫を考える場合は再生を考え8月中旬までに1番草を刈り取ります。収穫後は追肥を行ってください。

口蹄疫は依然としてアジアを中心に発生が続いています。昨年悲劇を2度と繰り返さないためにも、牛舎消毒はも

とより、畜舎へ入る場合の衣類・長靴の交換などさらなる防疫の徹底をお願いします。

(須崎 哲也)

## 工芸作物

### ◆茶

---

これからの作業は、来年一番茶の親葉となる秋芽の充実と葉層や芽数の確保を図るため、大変重要な管理作業となります。

#### 1 最終摘採時期

最終摘採は、秋芽充実のため山間地域では7月中旬、その他の地域では7月下旬～8月上旬を目安に終了します。また、摘採、整枝後の遅れ芽や徒長枝は、秋芽を切らないよう注意し整枝しておきます。

#### 2 病虫害防除と栽培管理

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、炭疽病、もち病、新鞘枯死症等の病虫害の発生が懸念されます。秋芽萌芽から1葉期と3葉期頃の2回、殺虫剤と同時防除として保護剤、治療剤、残効性等の薬剤の特徴を活かした効果的な防除を図ります。また、多発傾向にあるハマキ類は8月中旬頃に、クワシロカイガラムシは、8月中旬～9月上旬に第3世代幼虫のふ化が予想されます。発生状況を確認し、発蛾最盛期又は幼虫ふ化初発7～10日後の防除徹底を図ります。

高温・乾燥は秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30<sup>㍉</sup>の散水が効果的です。

#### 3 秋肥の施用と土づくり

施肥は、経費削減のため、土壌診断により、適正施肥を心掛けます。中山間地や寒害を受けやすい品種、幼木、地域では8月下旬、この他は9月上旬までに地域の施肥基準に準じ施用しましょう。

特に、土壌が固く、根量が少ない茶園では、9月上旬までにたい肥1～2<sup>㍉</sup>施用と深耕を実施し、土づくりと発根促進による肥効率向上に努めます。

(岩切健二)

## ◆しいたけ

---

しいたけの菌糸は、高温に弱く、ほだ木内の温度が35度以上になると菌が死滅する恐れがあります。

夏場の高温によるほだ木の乾燥は、しいたけの発生量への影響や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぎ、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くしましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、この時期は菌糸の成長が最も良い時期であると同時に、害菌も活動しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、害菌の発生が確認された場合は、被害木を取り除いて隔離したり、被害がひどい場合には焼却処分しましょう。

このほか、収量アップのためには古ほだ木からの発生が重要です。天地返しやほだ回しを行い、しいたけ菌の活性化を図りましょう。

(田中 貴司)

## ◆葉たばこ

---

先月の台風6号により被害に遭われた農家の皆様には、心からお見舞い申し上げます。

今月は、夏期深耕や通常期買入に向けての出荷規格確認などが、主な作業になります。また、総掻き後、残幹処理が終了していない場合は、病害の耕種的防除のために早期に処理し、ほ地外へ持ち出しましょう。

1 夏期深耕は、立枯病などの菌密度低下や土作りのために重要な作業となります。今年病害が出たほ地は特に念入りに行い、最低3回以上行うように努めましょう。

2 貯蔵害虫発生防止のためセリコは通常期買入終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。また、本葉系にもビニル梱包を行いましょう。梱包時は吸湿に注意し、口は養生テープなどで塞ぎましょう。

3 通常期買入に向けて出荷包の異物、過水分、色損葉の混合などのチェックを行いましょう。

(中矢恭輔)

### 内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

# なになに農業アラカルト

## ウリ類の黄化えそ病の対策

---

キュウリ黄化えそ病（MYSV）の発生が県内各地で見られるようになってきました。この病気はミナミキイロアザミウマが媒介するウイルスによるもので、ウリ科作物に感染し、特にキュウリやメロンでは、感染した株の葉は枯れ、場合によっては果実を奇形にするため、栽培初期に感染すると収量が著しく低下します。このウイルスが地域で広がらないように、自分のほ場で被害が大きくならないように、適切な準備と栽培期間中の対応が必要です。

### 1 対策の基本

害虫が媒介するウイルスの対策の基本は「入れない、増やさない、出さない」です。防虫ネットや近紫外線除去フィルム、光反射マルチなどを利用して、育苗段階を含めウイルスを持った害虫がほ場に侵入する数をできるだけ減らします。このとき、ほ場の中や周囲に雑草があると、そこがウイルスの伝染源になりますから、可能な限り除草します。露地栽培では、使える資材は施設栽培より少なくなりますが、障壁作物や光反射資材は利用できます。

### 2 感染株の処分

資材を利用しても、ウイルスが発生することがあります。このときは、感染した作物が伝染源になりますから、抜根します。感染した作物を早く発見して抜根すると、数株の発生で終息することがある一方で、感染株を放置したために数百株単位で発生し、改植を余儀なくされる事例があります。特に夏の栽培では、急激にまん延して抜根が間に合わないことがあります。そのときは、次作の発生源にならないよう栽培終了と同時に残さの処分が必要になります。

### 3 総合的防除が必要

ウイルスがまん延しないように、ウイルスを媒介するミナミキイロアザミウマを適切に防除することも必要です。ただし、このミナミキイロアザミウマは農薬に強いため、化学農薬だけでなく、微生物や天敵、粘着板といった方法も活用する必要があります。

次作や近隣のほ場に伝染することを防ぐために、ほ場から

出さない対策も重要です。栽培終了時に施設を閉め込んで太陽熱で殺虫したり、残さを適切に処分してウイルスがほ場の外に出ないようにしましょう。

いろいろな手段を組み合わせた対策が必要になりますが、確実な防除効果が出る準備と対策を実施しましょう。

(黒木 修一)



葉の症状



ミナミキイロアザミウマ成虫

## 向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稲	いもち病(葉) ※	やや多	<p>葉いもちの発生が、7月の中旬以降多くなっており、上位葉に発生している場合は防除します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。</p> <p>セジロウンカ、コブノメイガの発生は少ない状況です。トビイロウンカは、7月第2半旬に飛来が確認されました。わずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場で発生に注意します。</p>
	紋枯病	並	
	セジロウンカ(夏ウンカ) トビイロウンカ(秋ウンカ) ※ コブノメイガ	やや少 並 やや少	
野菜類等	アブラムシ類	並	<p>アブラムシ類は、わずかな発生量でもウイルス病を媒介して、キュウリやピーマン等に大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後は葉裏で集合して加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。</p>
	ハスモンヨトウ等の ※ チョウ目害虫	並	
カンキツ類	かいよう病	やや多	<p>今年には既に数個の台風が接近し影響を受けましたが、これからが本格的な襲来時期です。台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。</p> <p>梅雨時期の降水量が多く、黒点病の発生がやや多い状況です。感染源である枯枝の除去に努めるとともに、防除後の積算降水量が300mmになると次の防除が必要です。</p> <p>ミカンハダニは、高温乾燥条件で生息密度が高まります。また、高密度になると防除効果が低下しますので、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。</p>
	黒点病	やや多	
	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	やや多 並	
茶	炭疽病 ※	やや多	<p>炭疽病の発生が多いため、防除情報を発表しています。秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。</p> <p>ハマキ類の防除適期は発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期ですので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。</p> <p>チャノキイロアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い薬剤か1週間間隔での連続散布を行います。</p>
	輪斑病	並	
	チャノコクモンハマキ	やや多	
	チャハマキ	並	
	チャノホリガ	やや多	
	カンザワハダニ	並	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
チャノミドリヒメヨコバイ クワシカガラムシ	並 やや少		
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。</p> <p>病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<a href="http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki">http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki</a>です。</p>			